

midnight poetry lounge vol. 7

入沢康夫 「詩の後ろにあるもの」

日時 2011年7月30日(土)
14:00~17:00

出演 入沢康夫

会費 1500円

場所 神田神保町・東京堂書店6階会議室

予約・問い合わせ先 070-5579-1564

poetrylounge2010@gmail.com

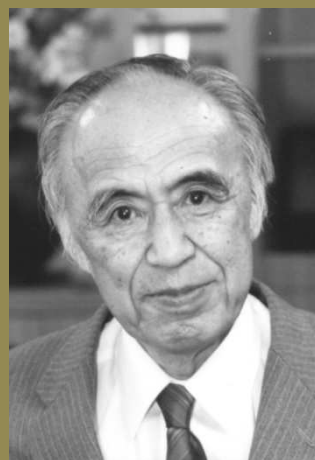
ミッドナイト・プレス(中村)



3月11日から4ヶ月が経とうとしていますが、いかがお過ごしでしょうか。

いま詩をどのように考えたらいいのだろうと、入沢康夫氏の『詩の構造についての覚え書』を本棚から取り出して読み始めたのは、2011年が明けてまもない頃でした。読み進むにつれて、いま詩について考えるべきことのひとつひとつが、ここに書かれていると確信を深めました。この「覚え書」が書かれたのは1966年ですから、いまから45年以上前ですが、ここで思考されていることがひとつも古びていないことに驚きました。「『詩とは、語を素材とする芸術ではなく、言葉関係自体を、いや、言葉関係自体と作者(または読者)との関係そのものさえをも素材とするといった体の芸術行為である』というところまで論を進めることもできると思う」というあたりを読んでいると、詩において、未踏の領域はいまなお残されているように思われてくるのです。そして、「詩とは何か」と、「手もちの材料」をひとつひとつ確かめながら思考するその強度は、いま、なによりも必要なものではないかと考えました。いま入沢康夫氏は詩についてなにを考えられているのか。それをお伺いしたくて、midnight poetry lounge へのご出演をお願いしました。みなさんのご来場をお待ち申し上げます。

ミッドナイト・プレス 岡田幸文



入沢 康夫(いりさわ やすお、1931年11月3日 -)

詩人、フランス文学者。

詩集に、『倅せ それとも不倅せ』(書肆ユリイカ 1955)、『季節についての試論』(錬金社 1965 H氏賞)、詩集『わが出雲・わが鎮魂』(思潮社 1968 読売文学賞)、『死者たちの群がる風景』(河出書房新社 1982 高見順賞)、『漂ふ舟 わが地獄くんだり』(思潮社 1994 現代詩花椿賞)、『遐い宴楽』(書肆山田 2002 萩原朔太郎賞)、『かりのそらね』(思潮社 2007)など多数。

詩論集に、『詩の構造についての覚え書』(思潮社、1968)、『詩的關係についての覚え書』(思潮社、1979)、『ネルヴァル覚書』(花神社、1984)、『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告』(筑摩書房、1991)、『「ヒドリ」か、「ヒデリ」か』(書肆山田 2010)など多数。

その他ネルヴァル、ポー、ブルトンなどの訳書多数。

本年、『葉紀甫全口語詩集』を個人発刊。